

## 文化財保存新潟県協議会・第18回大会

# 「日本遺産と火焰型土器 ～地域の魅力発信を期待される文化財～」

今年度の文化財保存新潟県協議会総・大会を以下のように開催いたします。

総会は文化財保存新潟県協議会会員（新潟県内在住の文化財保存全国協議会会員）が年に一度集まり、本会の活動を振り返り、今後の指針を協議する重要な会です。また、大会は広く市民に参加を呼びかけ、遺跡と歴史と一緒に学ぼうという機会です。

文化庁は、4月19日開催の「日本遺産審査委員会」の審議を経て、全国の自治体から提案のあった67件の中から新たに19件を「日本遺産（Japan Heritage）」に認定しました。これは、文化庁が平成27年度に創設した制度で、地域の歴史的な魅力や特色を通じて日本の文化・伝統を語るストーリーを認定するもので、ストーリーを語る上で不可欠な魅力ある有形・無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外に発信することで地域活性化を図るものです。そして今回認定された中のひとつが、新潟市・三条市・長岡市・十日町市・津南町が申請した『「なんだ、コレは！」信濃川流域の火焰型土器と雪国の文化』です。芸術家・岡本太郎を驚愕させ、思わず「なんだ、コレは！」と叫んだという火焰形土器を中心に、信濃川流域の豊かな自然の中で生み出された縄文時代から今に続く雪国文化を日本の遺産として見直そうという試みです。そして今回の日本遺産認定は、火焰土器に代表される縄文をキーワードに、信濃川中流域の市町村が交流・連携をはかり、情報発信をしてきたひとつの成果となるものです。

そこで今回の大会では、火焰形土器を中心とする信濃川流域の豊かな縄文文化を市町村の枠組みを超えてどのように保護し活用していくかを考えます。お話しは、昭和11年（1936）12月31日に近藤篤三郎氏によって発見された「火焰土器」出土の地、馬高遺跡を擁する長岡市の小熊博史さん、愛称「縄文雪炎」など新潟県唯一の国宝となった笹山遺跡出土遺物をまちづくりに積極的に活用する十日町市の石原正敏さん。ともに縄文時代を研究し、地域の遺跡の発掘に携わり、地元博物館で情報発信に奔走するおふたりから、火焰形土器の魅力、地域における文化財活用の現状と課題、広域連携のあり方について語っていただきます。

大会は事前申し込み不要です。みなさんふるってご参加下さい。

**と き：2016年7月31日（日）**

**ところ：新潟市歴史博物館（みなとぴあ）・2階セミナー室**

**日 程：総 会 12：30～13：00**

**大 会 13：00 一般受付開始**

**13：30開会～16：30（終了予定）**

講演「馬高一火焰土器をめぐる人・コト」

小熊博史さん（長岡市立科学博物館 館長）

「笹山－国宝・火焰型土器と雪国文化」

石原正敏さん（十日町市博物館 副館長）

**懇親会 17：00～（要予約。会費4500円程度。）**

※資料代500円をいただきます。詳しくは、同封のチラシをご覧ください。

## ふたつの風土記の丘に展開する古墳群、古代官衙と寺院・・・

# 「那須・下野の風土記の丘を訪ねる旅!!」に参加して

川上真紀子



那須国造碑の模型前（湯津上資料館）



那須八幡塚古墳にて



復元された回廊にて（下野薬師寺跡）



しもつけ風土記の丘資料館

2015年11月28・29日、文新協秋の見学旅行を開催しました。今回は、栃木県の古墳と古代官衙・寺院をめぐる、古墳時代から律令国家へ移行する、そのダイナミズムを体感しようというのが旅行の目的でした。予想を上回る参加者で、マイクロバスで満員の少し？いやかなり窮屈な旅でしたが、その内容は十分満足のいくものでした。

新潟駅南口を8時過ぎに出て、お昼には那須国造碑のある笠石神社に到着しました。この碑文は、それまで国造と呼ばれていた人々が律令制の下で郡司（ここではまだ評と呼ばれていた）に転身する姿を読み取れる大変貴重なものです。旅のスタートとしてうってつけのものでした。さらにこれが「光圀公」による発見で保存されたことも文化財が歴史の中で生かされていくありようを示していました。

続いて大田原市なす風土記の丘湯津上資料館を見学の後、その徳川光圀が日本初の発掘調査をしたことでも名高い下侍塚・上侍塚古墳を見学しました。説明してくださったのは『侍塚古墳と那須国造碑』を書かれた眞保昌弘さん。古墳是那珂川右岸の微高地にあり、墳頂部に立つとその大きさとかちつとした前方後方型の墳形、そして那須国造碑とつながる立地を体感しました。

那珂川を下り那須小川古墳群へ。ここは、駒形大塚古墳・吉田温泉（ゆぜん）神社古墳・那須八幡塚古墳などの総称ですが、前期の前方後方墳の宝庫です。ここでは復元された那須八幡塚に登ることができました。古墳是那珂川の右岸に立地し、すぐ下に川が流れていて、この古墳から北に吉田温泉古墳をはじめとする方墳で形成される吉田神社古墳群、さらに北上すると駒形大塚古墳があります。墳頂からは、吉田神社古墳群の森がのぞめ、穏やかな農村の中に古墳群が息づいている様子に感銘を受けました。

最後に那須官衙遺跡、那珂川町なす風土記の丘資料館をじっくり見学。ここでも詳しい説明いただきました。

翌日は、宇都宮市周辺の中・後期の古墳群と国庁・国分寺などを見学。前期の古墳群と郡衙中心の那須から大きな様変わりです。ホテルを早くから出発し、塚山古墳群へ。ここはきれいに植栽されて保存されています。地元の皆さんが清掃のために集合しているところに出会い、人々の憩

いの場として活用しながら保存する、ひとつの形を見ました。その後、田川の東側に立地する笹塚古墳を見学。田川を挟んで5世紀代に出現したふたつの100m級の前方後円墳を見ることができました。

その後、下野薬師寺歴史館を見て、一部復元されている下野薬師寺を見学しました。広大な敷地に整然と並ぶ伽藍と地表に顔を出している瓦の遺物の多さに驚きました。古代国家が下野を重要な

地と考え、中央の技術を駆使して膨大な財と人で作り上げたと思うと、古墳時代とは全く異なる権力の大きさを感じることができました。しもつけ風土記の丘資料館、下野国分寺跡、甲塚古墳、摩利支天古墳・琵琶塚古墳と足早に見学。栃木県埋蔵文化財センターで昼食をとり、センター内を案内いただき、最後に下野国府国庁跡を見学。充実の旅をおえ、予定通り夜新潟駅で解散、お別れしました。頭も心も荷物もいっぱいになった旅でした。

### 【参加者の感想

- 生まれて初めて栃木県に足を踏み入れました。豊かな文化的土壌とそれを護り伝える人達の熱い思いを知ることができ、いっぺんで好きに（この地域が）なり、また訪れたいと思いました。越後と下野の古代からの文化的交流も知ることができたのも収穫でした。
- 色々な事を学ばせていただきました。古の道の事、焼き物の事、少しこれから学びたいと思いました。2日間、これだけ回れたのは驚きです。終わってほっとした様な、寂しい様な、充実感でいっぱいです。
- 短い2日間でしたが、なんとも盛り沢山な内容でした。こんなに写真を撮ったこともないでしょう。今回は、律令国家がこんな辺境(?)の東北入口まで貫徹していく様子を伺うことができました。これから勉強するのに、リアリティのある学習ができそうです。沢山の資料を買い込んで、重い重いカバンで帰ります。
- 古墳が点在しているのに驚きました。歴史に学ばない国は滅びるとか? 今の日本を見ているともの悲しくなります。ご案内して下さった眞保さんのお話、又、お聞きしたいと思いました。次の成果を期待したいと思います。今回も知らない事だらけで、那須・下野の国、深いなア～!

## 「古代遺跡講座」第2回目・3回目を開催

小林 隆幸

第1回目の「古代遺跡講座」から1年以上の時間が経過しました。そのブランクを埋めるように短期間に連続して、第2回目の講座が2015年12月23日（水・祝）に、ひと月後の2016年1月23日（土）には第3回目の講座が、新潟市歴史博物館（みなとぴあ）を会場に開催しました。

第1回目の入門編を受け、2回・3回目は、県内各地域の古代遺跡をテーマに実施されました。

### ■第2回目は古代岩船郡をテーマに鈴木俊成さんが語る

第2回目の講座は「古代岩船郡の官衙遺跡について～村上市西部遺跡を中心に～」をテーマに行われました（約40名が参加）。講師の鈴木俊成さんは新潟県埋蔵文化財調査事業団に所属し、西部遺跡の調査では監督者として携わっておられました。その縁で今回の講師を引き受けていただいたので、鈴木さんといえば縄文時代の専門家という先入観があったため、古代史と鈴木さんの組み合わせに当初、意外性を感じていました。ところが、話が始まってみると、越後の古代における岩船郡の領域の問題や特徴、またその中での西部遺跡の位置づけなど、面倒で面白いところを丁寧に解きほぐしていく語り口に、最初のイメージはすっかり払しょくされ、古代史の専門家を見る目が変わっていました。

話題の中心になった西部遺跡は荒川の右岸に所在し、遺跡から河口までの距離は2kmほどです。日本海沿岸東北自動車道の建設に伴って平成16～20年に本格調査が実施されました。8世紀から10世紀にわたって存続し、鍛冶や漆塗りなどの作業を行っていた複数の工房跡や漆紙文書などが出土し、648年につくられた磐舟柵を後に引き継いだ役所が関連していた遺跡として注目されています。

分かりやすく解きほぐす例では、漆紙文書の説明もその一つです。最初は国府と考えられる頸城宮に仕えるために磐船郡内の役所の仕事をしばらく休むことを申し出る文書であったものが、その後、裏面に郷名や戸主名を記載した名簿に使用され、さらに記録に使えなくなった紙を西部遺跡

となる磐船郡の役所の関連施設に払い下げられて、漆容器の落し蓋に利用されたという流れを、平川南先生の説を基に興味深く解説してくれました。この漆紙文書は磐船郡に存在した「佐伯」「坂井」という郷名が記されていたことでも注目されました。

また、今回の報告で特に注目されたのは条里制を導入した水田の報告です。全国的に8世紀の中頃から始まる条里型水田が、西部遺跡では比較的早い8世紀後葉には導入され、その水田化にあたっては、ハンノキなどの樹木が伐採され一気に水田に変わり、その後には手入れの悪い水田となって放棄されていったという様子が植物依存体の科学分析から具体的に読み取れるとのことでした。この水田跡からは当時の稲作技術を知るだけでなく、遺跡周辺の環境や景観を考えるうえでも重要なようです。

## ■第3回目は古代古志郡をテーマに田中靖さんが語る

第3回目の講座のテーマは「古代古志郡の官衙遺跡について～八幡林官衙遺跡群の調査成果～」です（約35名が参加）。講師の田中靖さんはかつて和島村教育委員会に所属し、旧和島村八幡林遺跡の調査で新潟県の古代史の大発見となる「沼垂城」木簡を発掘した担当者です。現在は長岡市立科学博物館に勤務されています。

本講座の古代古志郡の舞台となる現在の長岡市和島地域は、八幡林遺跡の発見以来、官衙関連遺跡の発見が続き、越後の古代史を解明するうえでの数多くの調査成果がもたらされています。今回、田中さんから八幡林遺跡群としてまとめられる八幡林遺跡・下ノ西遺跡・門新遺跡のほか、最近調査された川東遺跡・浦反甫東遺跡の調査成果についての報告がありました。それぞれの遺跡については、時期によって変化する遺跡の性格などを興味深く解説していただきました。例えば八幡林遺跡であれば、8世紀前半～中葉の「沼垂城」の木簡や「石屋木」の墨書土器がつくられた時期であれば、軍事や交通の要衝に設置された国レベルの官衙であった可能性があること。9世紀前半であれば、郡司の長官である「大領」を示す墨書土器がつくられたところで、同時期の四面庇付建物の建物は「大領の館」であった可能性があること。9世紀後半以降では官衙的な色彩は薄れ、それまでの機能は下ノ西遺跡に移った可能性があることなどです。9世紀後半になると八幡林遺跡は衰退し、10世紀初めには消滅してしまうようです。その理由をはっきりしていませんが、貞観5（863）年の地震をはじめ、この時期には地震が多発し、遺跡からも地割れや断層がみられることから、地震などの自然災害による可能性があることなども指摘されました。

1990年の11月、田中さんが現場を離れ他の人に調査を託していた時に、文字が書いてある木簡のようなものが出土したという報告を受け急いで戻り、ポリタンクに水を汲んで洗浄したところ、「沼垂城」「養老」の文字が見えてきたという「沼垂城」木簡の発見エピソードをあらためて伺いました。25年を経過した今、当時の感動がよみがえってきました。

そのほか、分割して出土した1号の「郡司符」木簡が、その後のフルイ作業によって破片が見つかり、すべての木簡に破片が揃った話などは、恥ずかしながら初めて知りました。

報告にあったそれぞれの遺跡の性格から、越後の古代史の解明には、しばらく和島地域から目が離せないことを痛感しました。

**編集後記** この『会報』は文全協会員でなくても、文新協行事に参加された方には可能な限りお送りしています（ご参加なき場合は郵送を取りやめる場合があります）。名簿は本会からの連絡にのみ使用し、個人情報保護に留意し厳正に管理しています。会報送付がご迷惑な方は事務局までご一報下さい。

**文化財保存新潟県協議会事務局**（入会についてのお問い合わせも）

電話：090-2735-5536

E-mail：bun-sin-kyou@js8.so-net.ne.jp

ホームページ：http://www014.upp.so-net.ne.jp/bunsin-k/

文全協のホームページ  
もぜひご覧ください。